

学外教育活動における危機管理 ～第42回海外研修航海における事例について～

実施報告

日時: 2011年6月22日(水) 17:00～18:00

場所: 東海大学湘南キャンパス 8号館 408教室

司会: 岡田 エ(チャレンジセンター准教授)

内容: 1. 学外教育活動における危機管理
2. 成果と反省



1. 学外教育活動における危機管理

岡田 エ(チャレンジセンター准教授)

第42回海外研修航海の副団長として参加した。危機管理という観点から説明する。今回20年ぶりの寄港地として2カ所加わった。研修団として、学生97名、団役員14名が参加した。事前研修を三保研修所で2泊3日のスケジュールで行った。

規則に従って、出航後72時間以内に避難訓練を行った。船は15ノット(約30km/h)で走行し、船の周りは360°海である。初めての人は船酔いと集団生活でこれまでにないハードな生活を経験する。また、規則正しい生活に慣れなければならない。3日目ぐらいから船上生活に対応できるようになる。点呼は、人がいつまで存在していたかを確認する上で、非常に重要な意味がある。朝夕、行事の集合時、必ず点呼を取り、学生の安全を確認した。夜は安全上の配慮より甲板への外出を禁止した。医師、看護師の指導の下で、学生全員が救命救急訓練を受けた。震災後であったが、洋上卒業式を行った。航海は順調に進み、3月25日には清水港近郊に到着した。



研修団の組織体系に従って、航海中毎晩、船側スタッフとの打ち合わせ、団役員、学生長、班長会議を行った。特に船側スタッフとの打ち合わせをスムーズに行うため、副団長と一等航海士との意思疎通を図った。制約された環境の中でストレスが溜まりと体調不良者が出現する。学生は最初の寄港地でかなり回復する。日本に向かう方向になると元気が出てくる。精神的な影響が大きい。ストレスから昔患った病気を再発する者もいる。医師、団長、副団長と協議し、代々木、伊勢原に衛星電話で連絡し、対応した。

今回メールマガジンを使って、研修航海の情報を保護者向けに配信するサービスをスタートさせた。毎日、望星丸の位置と天候、波などの状況をメールマガジンとして配信した。東日本大震災では、

これが非常に役に立った。ニューカレドニアを出港した次の日、3月12日の朝に3.11震災のことを知った。FAXによる号外新聞が貼り出され、日本での震災を知った。東北出身者には衛星電話を利用して自宅、携帯に連絡を取るようにしたが、電話での連絡はできなかった。そこで、メールマガジンで保護者に向け事務局へ連絡するようにと配信した。多くの保護者からの連絡が事務局に送られ、その内容を学生食堂に貼り出した。また、メールの届かない保護者に対して事務局が電話で確認を行った。3月14日までにすべての学生の保護者と連絡を取ることができた。日本からの情報はFAXの新聞とラジオ放送、インターネットから入手できたが、必ずしも正確なものでなかった。よって、学生には情報を選定して配信した。不正確な情報では学生に不安を与える。

震災後、学生の自発的な会議が行われ、自分たちにできることを話し合った。学生全員で千羽鶴を折り、節水や節電など節約に努め、無事に帰国することを再確認した。

この海外研修航海は、究極のチャレンジセンター科目で集い、挑み、成し遂げ力の全ての要素を盛り込んでいると思う。

Q まとめのスライドの「しおり」について再度説明してください。

A 危機管理マニュアルとして、「研修のしおり」がある。過去の研修航海から引き継がれており、安全に対するマニュアルや船上生活の諸注意などが記載されている。例えば、研修航海は観光では無く、授業の一環であること。教員が把握できない状況で、事故が起きないようにするためのマニュアルである。

Q 大震災の時、どのように情報が入りそれを取捨選択し、学生に伝えたのか？学生の反応は？

A 日本の震災の被害状況は、FAXの新聞や短波放送によるNHKの国際ラジオ放送から入手できた。また、高額であるがインターネットを使うこともできた。日本の震災の状況や今後の航海の継続について船長、団長、副団長で協議し、学生に伝えた。被災状況については、不安を抱く部分も多く、情報を切り捨てて伝えた部分も多い。しかし、黙っていても嘘は言わない。

Q 今回の航海から、次回にむけて改善した方が良い点は？

A 行事に関してマニュアル化すべきである。はじめて乗船する団役員に対してもっとフォローが必要であったと思う。

Q 教職員のストレス発散は？ 学生は？

A 団役員や学生は、行事やみんなとの会話がストレス発散となった。また、アルコールやたばこがストレス発散となる場合もある。アルコールは、飲む飲まないにかかわらず、団役員間の意見交換としても役立った。後部デッキまたは学生食堂の空気清浄器にて喫煙が可能である。学生と団役員のコミュニケーションの場としても活躍した。ただし、船内では、日本の法律と同じ制限とし、20歳未満の学生には、禁酒、禁煙を促した。学生たちのストレス発散として、話をよく聞いてあげることは必要であろう。

Q 研修後の心のケアはどうしているのか？学生が授業に出られないとか、聞くが。

A 疲れからくるものと違うストレスがある。やる気がなくなることも多い。時間が解決してくれる場合が多い。仕事や授業といった通常の生活を進めていくと平常に戻っていくと考えられる。